

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 8 年度病虫害発生予報第 8 号 (11 月) について

このことについて、病虫害発生予報第 8 号を発表したので送付します。

予報第 8 号

トマトキバガの発生に注意しましょう

トマトキバガのフェロモントラップにおける誘殺数が 9～10 月にかけて増加しています。本虫は主にトマトを食害し、県内では令和 7 年 5 月に食害の初確認以降、すでに複数のほ場で食害が確認されています。本虫の食害痕は、葉ではハモグリバエ類、果実ではオオタバコガ等と混同しやすいことから、こまめには場を見回り、発生状況に十分注意しましょう。また、発生が確認された場合は登録薬剤でのローテーション散布を実施するとともに、残渣の処分を徹底してください。

<詳細は農研機構ホームページのトマトキバガ防除対策マニュアル - 基本情報編 - 参照>

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/174389.html

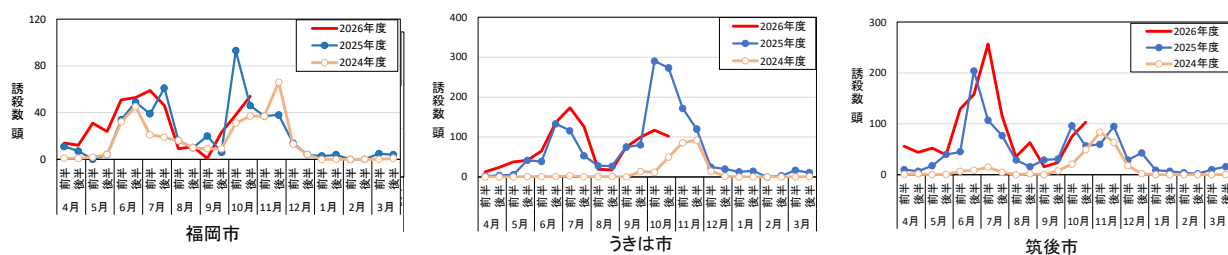


図 1 フェロモントラップにおけるトマトキバガの誘殺数

図 2 トマトキバガ成虫
(体長 5～7 mm)

図 3 葉における食害

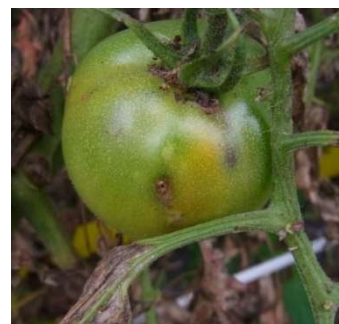


図 4 果実における食害

【写真提供：熊本県病虫害防除所】

11月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	11月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
冬春イチゴ	うどんこ病	やや少	並	並
	炭疽病	並	やや多	並
	ハダニ類	並	並	並
冬春ナス	灰色かび病	並	並	並
	すすかび病	並	並	並
	ミナミキイロアザミウマ	並	並	並
冬レタス	灰色かび病	並 ³⁾	並 ³⁾	並
	菌核病	並 ³⁾	並 ³⁾	並
冬キャベツ	黒腐病	並	並	並
	菌核病	並	並	並
	コナガ	少	少	並
野菜共通	ハスモンヨトウ	やや多	多	多
	オオタバコガ	多	多	多
	コナジラミ類	やや多 ⁴⁾	やや多 ⁴⁾	やや多

注1) 予報の発生量は、平年および前年との比較を「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、発生量の予想は各条件の＋を総合的に判断して導いています。

注3) 冬レタスについては2020年まで玉レタス、2021年以降リーフレタスを調査。平年値は両方を合わせた10年間の平均としています。

注4) 野菜共通・コナジラミ類では各地点の調査開始～2025年までの平均を平年値としています。

<予想される向こう1か月の天候（令和8年10月24日～11月23日）>

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。7月から高気圧に覆われやすく、降水量の少ない状態が続いています。向こう1か月の降水量は低気圧や前線の影響を受けやすいため多い見込みですが、これまでの少雨による影響が続く所があるでしょう。向こう1か月の日照時間は、少ないでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並20 高70% 高い見込み	少20 並30 多50% 多い見込み	少50 並30 多20% 少ない見込み

（福岡管区气象台 令和8年10月22日発表 1か月予報より抜粋）

【野菜：冬春イチゴ】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

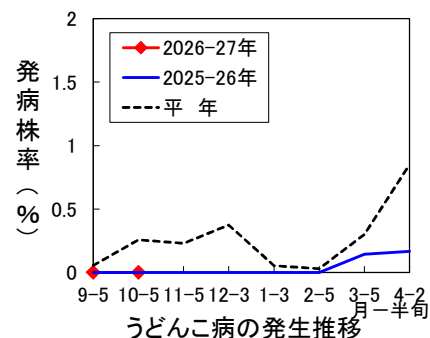
(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病株率 0%（平年 0.3%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 1.9%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。



※本年調査値：2026-27年、

前年調査値：2025-26年と表記、以下同様

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 不要な下葉は早めに除去する。薬剤防除は下葉かぎ後に行うと効果的であり、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。
- イ ビニル被覆後は発生が多くなるため、被覆前までに重点的に防除を行う。なお、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ウ 農薬の使用および散布等にあたっては、最終頁の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

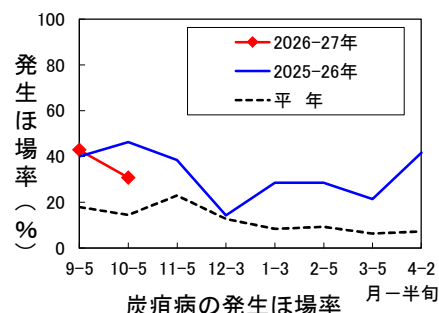
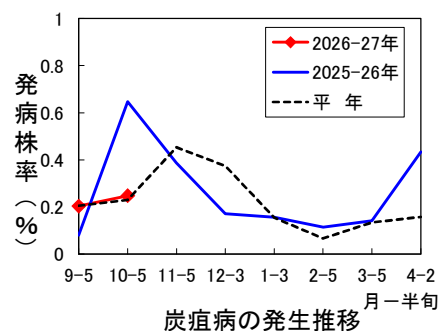
発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 10月5半旬調査の結果、発病株率は平年並であった（±）が、発生ほ場率は平年より高かった。
発病株率 0.3%（平年 0.2%、前年 0.7%）
発生ほ場率 30.8%（平年 14.5%、前年 46.2%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 炭疽病が発生した育苗ほの苗は、無病徴でも潜在感染のおそれがあるため、定植後の発生状況に気を配り、発病株の早期発見・早期除去に努める。
- イ 発病株は、残渣を残さずに周囲の土ごと掘り取り、速やかにほ場外に持ち出し処分する。
- ウ ハウス内の排水を図り、多湿にならないようにする。
- エ 来季に向けた対策として、炭疽病の発生が少ない育苗ほの苗を親株とし、親株に対する防除を徹底する。
- オ 親株用の苗に潜在感染の恐れがある場合は、天井ビニル被覆後に発生する秋ランナーからの採苗を行うなどして健全な親株の確保に努める。
- カ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。＜福岡県病害虫防除所ホームページ掲載の令和7年度病害虫発生予察技術情報第13号（イチゴ炭疽病菌薬剤感受性検定結果）を参照＞
<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/attachment/277102.pdf>



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

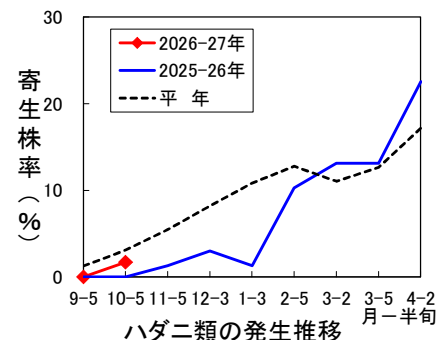
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
寄生株率 1.7%（平年 3.1%、前年 0%）
発生ほ場率 14.3%（平年 19.5%、前年 0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 被覆前の防除が不十分だとその後の発生が多くなりやすいので、防除により初期密度を低下させる。
- イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ウ ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性が乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するよう防除を行う。マルチ被覆時の摘葉後に、防除を行うと効果的である。



- エ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。
 <県ホームページ掲載の「病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照><https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/bojonotebiki.html>
- オ 親株用の苗や補植用の余り苗についても防除を怠らない。

【野菜：冬春ナス】

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病果率 0%（平年 0.03%、前年 0.3%）

発生ほ場率 0%（平年 2.9%、前年 28.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

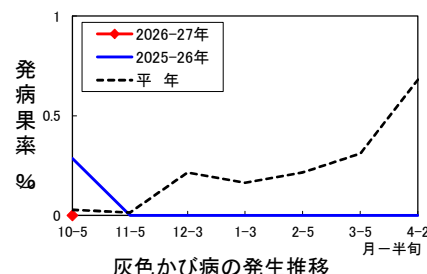
ア 発病果・発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ 不要な枝葉は除去・処分し、通風、採光をよくする。

ウ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策を心掛ける。

エ 病勢が進展すると防除が困難であるため、初期防除を徹底する。

オ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 すずかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病葉率 0%（平年 0.5%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 10%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

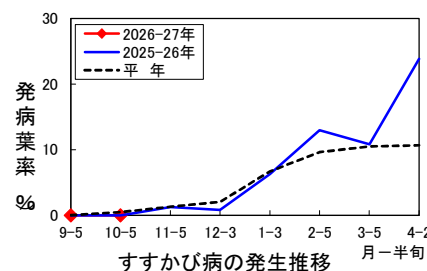
イ 樹勢が低下すると発病が助長されるため、樹勢が低下しないような肥培管理に努める。

ウ 不要な枝葉は除去・処分し、通風、採光をよくする。

エ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心掛ける。

オ 病勢が進展すると防除が困難となるため、初期防除を徹底する。

カ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

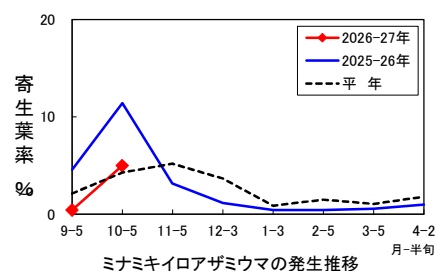
寄生葉率 5.0%（平年 4.3%、前年 11.4%）

発生ほ場率 42.9%（平年 38.6%、前年 57.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。



- イ 防虫ネットを展張し、定期的な薬剤散布を実施する。
- ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。
- エ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- オ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。

【野菜：冬レタス】※2020 年まで玉レタス、2021 年以降リーフレタスを調査。平年値は両方合わせた 10 年間平均。

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 10 月 5 半月調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0%（平年 0%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 0%、前年 0%）

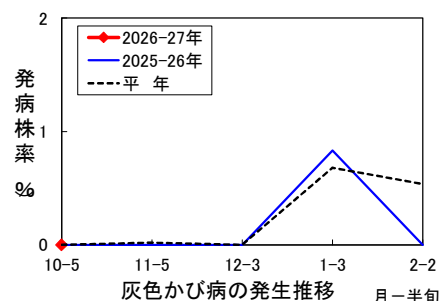
イ 向こう 1 か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病茎葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ 予防散布に努める。

ウ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 菌核病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 10 月 5 半月調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0%（平年 0%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 0%、前年 0%）

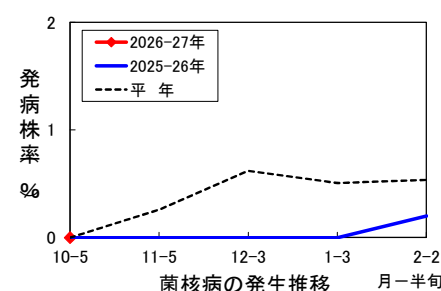
イ 向こう 1 か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病株は、菌核を作らないうちに土ごと抜き取り、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ 薬剤は株元にかかるよう丁寧に散布する。

ウ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：冬キャベツ】

1 黒腐病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 10 月 5 半月調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0%（平年 0%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 0%、前年 0%）

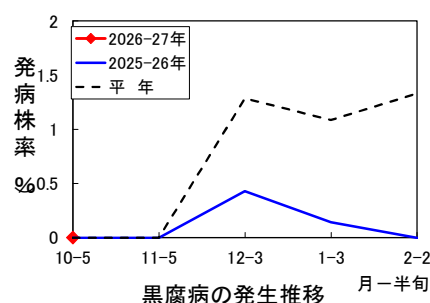
イ 向こう 1 か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病茎葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ 予防散布に努める。

ウ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 菌核病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0%（平年 0%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 0%、前年 0%）

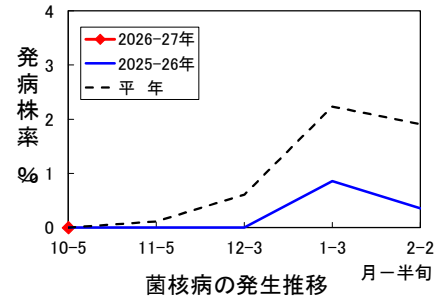
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病株は、菌核を作らないうちに土ごと抜き取り、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ 薬剤は株元にかかるよう丁寧に散布する。

ウ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 コナガ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少・前年並

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

寄生株率 0%（平年 1.0%、前年 2.0%）

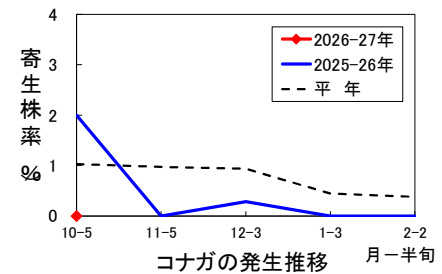
発生ほ場率 0%（平年 14.3%、前年 28.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア アブラナ科雑草は本虫の発生源となるため、ほ場周辺の除草を徹底する。

イ 一部の薬剤で感受性の低下が見られるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜共通】

1 ハスモンヨトウ

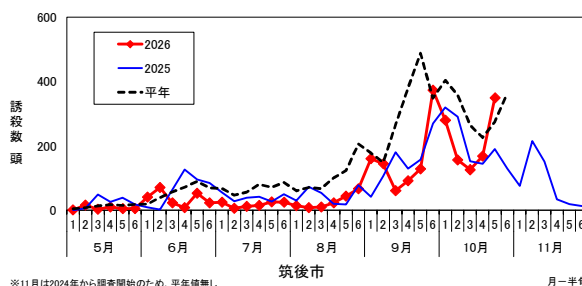
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

（令和8年10月27日付け 病害虫発生予察注意報第4号参照）

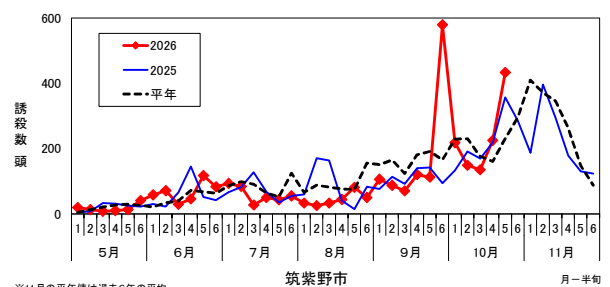
(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬～10月5半旬のフェロモントラップにおける誘殺数は、おおむね平年並で推移したが、一部地域で多発生であった（±～+）。



※11月は2024年から調査開始のため、平年値無し

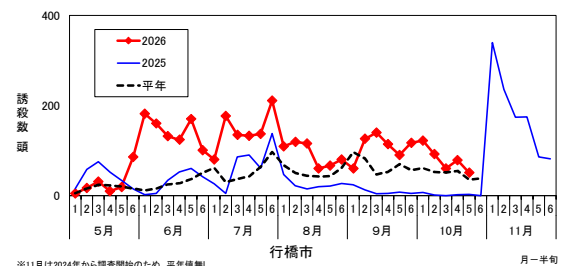
月一旬



※11月の平年値は過去6年の平均

筑紫野市

月一旬



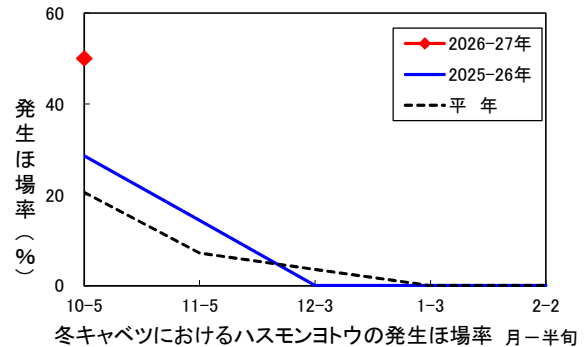
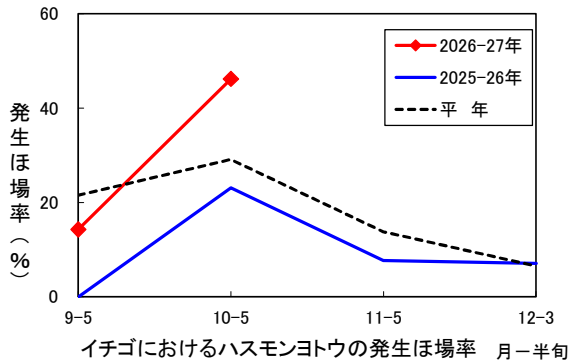
※11月は2024年から調査開始のため、平年値無し

行橋市

月一旬

フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺数の推移

- イ 10月5半旬調査の結果、イチゴと冬キャベツで発生ほ場率が高かった（＋）。
 イチゴにおける発生ほ場率 46.2%（平年 29.1%、前年 23.1%）。
 冬キャベツにおける発生ほ場率 50.0%（平年 20.5%、前年 28.6%）
- ウ 冬春ナスの10月5半旬調査では、複数のほ場でハスモンヨトウの発生と被害が確認された（＋）。
- エ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



（3）防除上注意すべき事項

- ア 地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら直ちに防除を行う。
- イ 薬剤防除は若齢幼虫を対象に実施する。
- ウ 一部の薬剤においては、薬剤感受性の低下が懸念されることから、薬剤の選定に留意する。
 また、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- エ 今後の発生状況については、病虫害防除所のホームページを参照する。（以下の害虫についても同様）

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#daizu-yasai>

2 オオタバコガ

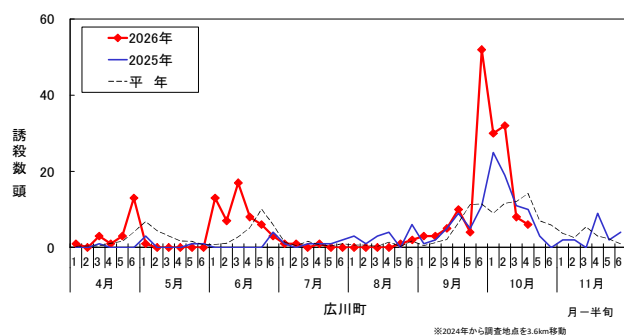
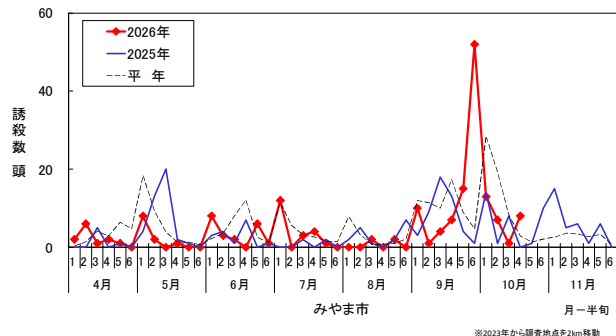
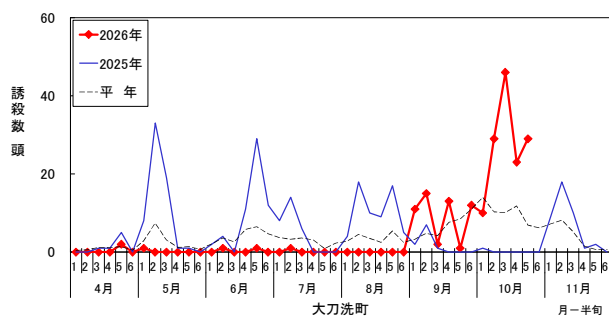
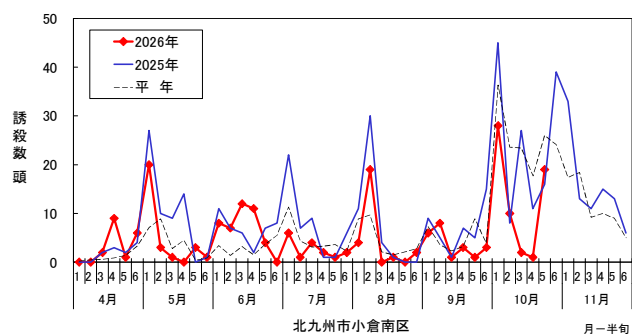
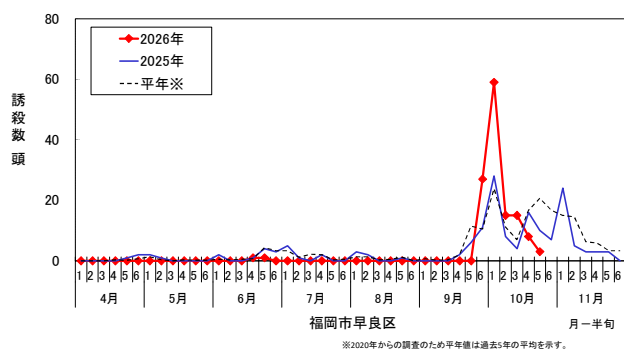
（1）予報の内容

発生量：平年・前年より多

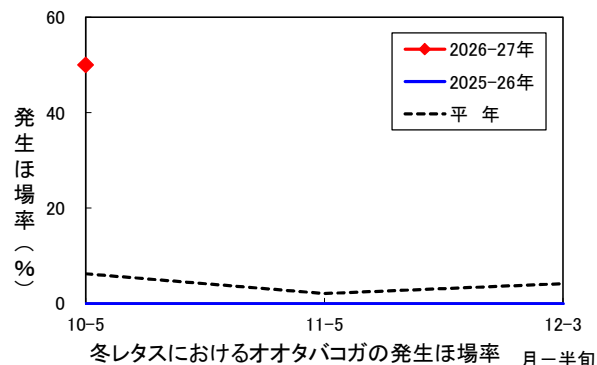
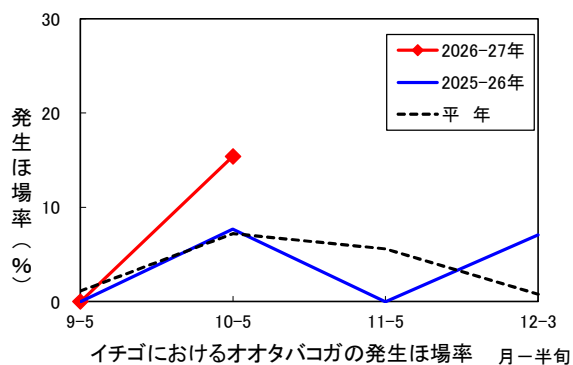
（令和8年10月27日付け 病虫害発生予察注意報第4号参照）

（2）予報の根拠

- ア 9月5半旬～10月4半旬のフェロモントラップにおける誘殺数は地点によって異なるものの、平年より多く推移した（＋）。
- イ 10月5半旬調査の結果、イチゴと冬レタスで発生ほ場率が高かった（＋）。
 イチゴにおける発生ほ場率 15.4%（平年 7.2%、前年 7.7%）。
 冬レタスにおける発生ほ場率 50.0%（平年 6.3%、前年 0%）。
- ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺数の推移



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 地域により発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら直ちに防除する。
- イ 薬剤防除は若齢幼虫を対象に実施する。
- ウ 同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

3 コナジラミ類 ※各地点の調査開始～2025 年までの平均を平年値とする。

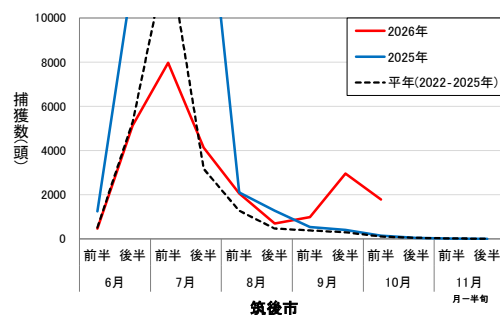
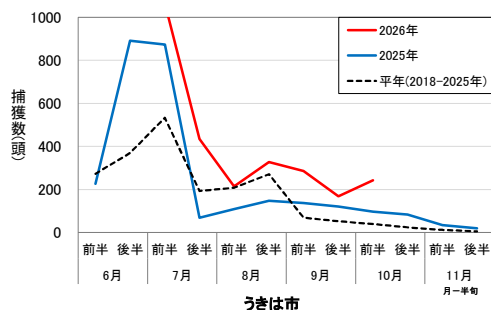
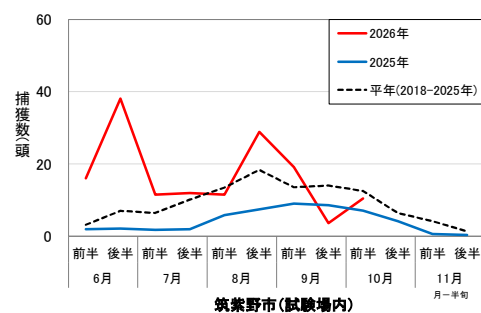
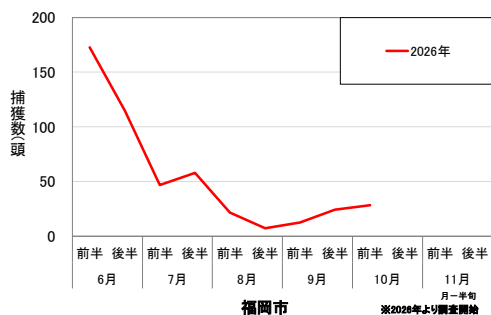
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9 月後半～10 月前半の粘着板トラップにおける捕獲数は、地点によって異なるものの、平年よりやや多く推移した（±～+）。

イ 向こう 1 か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



黄色粘着板におけるコナジラミ類の捕獲数の推移

注) 冬春トマト栽培施設周囲の東西南北 4 か所に黄色粘着板を設置

(3) 防除上注意すべき事項

ア 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは 0.4mm 以下にする。

イ 施設内側に黄色粘着シートを設置するなど発生状況を把握し、発生を確認したら、薬剤防除を行う。

ウ ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。農薬を使用する際は、使用者自身の安全確保はもちろん、周囲の人や家畜、隣接する作物、河川等の環境への影響にも十分配慮してください。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。※同一農薬であっても、メーカーによって登録内容が異なる場合がありますので、しっかり確認する。

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として適正に処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布は場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。残液は、ほ場外への流出や環境、後作へ影響が生じないように十分配慮し、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌に散布する。

※農薬散布に際しては、残液が出ないように必要な量の散布薬液を準備する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。

病虫害防除所のホームページでは、各種病虫害の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用ください。

○福岡県病虫害防除所のホームページへのアクセス

URL : <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html>

または右 QR コード①

○X のアカウント（福岡県農作物病虫害情報）へのアクセス

URL : https://x.com/PPDPO_Fukuoka または右 QR コード②

①⇒



②⇒

